

## 巻頭言

明治学院大学・国際学部附属研究所は、学部教員の共同研究と個人研究のサポートを主要な任務としている。その研究成果は、講義内容等にも活かされ、学部・大学院教育の充実にも大いに資するはずである。なぜなら、研究こそが深く濃い内容を生み出し、その深く濃い内容理解・研究こそが講義を豊かなものにしてくれるからだ。難しいことを、決して水準を落とすことなく、易しく、分かりやすく語ることは難しい。この意味で研究こそが、学部教育充実の「基本のき」であり、附属研究所に期待されていることだろう。その期待に応え、今年も教員たちの研究成果を発表できることは大きな喜びである。

共同研究は最終報告が2本、中間報告が2本である。表題をみただけでもその多様性がうかがえる。その中で竹尾茂樹所員が主催した「海と山が醸成するアジアの文化」（最終報告）では、個人論文ではあるが、「近代化と『山の文化』の変容—マタギ文化の歴史的検討を通して—」が掲載された。

原武史前所長の公開セミナーの報告がある。昨年度は「歴史と現在」をメインテーマに、毎回多彩なゲストを迎え、「都市空間」、「文学と東京」、「戦争と鉄道」、「演歌と夜汽車」等々の論題で対談するという企画であった。成果は『歴史と現在』（河出書房新社）として出版されている。フォーラムは学部の教員の研究発表の場である。多彩なテーマは、「知の刺激」をファカルティー・メンバーをはじめとして、大学全体に与えたと思う。

こうした成果を研究所が発信できたことを誇りに思う。だが、我々はこちらにとどまってはならない。とくに共同研究の質の充実が求められるだろう。共同研究は、問題意識の摺合せ・研究方法と資料の共有のもとづくものである。文字通り力を合わせてことにあたる「協同」の成果が、次にわれわれに求められてものである。

2012年12月

国際学部附属研究所  
所長 涌井 秀行